論考

拡張するドローイング

小川綾子
（東京都江戸東京博物館学芸員）

ドローイングは、かつては作品制作のプロセスにおける二次的なものとみなされ、習作、下絵、スケッチ、図面と同様に扱われていた。支持体は紙に限定され、日本語では「素描」と翻訳されていた。しかし、1960 年代以降の実験的な芸術実践を経て、ドローイングは「線表現」を核にジャンルを横断し、より広義のものへと拡張、発展してきた。

1960 年代から 70 年代における大きな変化としては、コンセプチュアル・アートやミニマリズムの芸術動向の中で、線が二次的に何かを表象するための虚像ではなく、線そのものが表現であり、リアルなモノであるということが強調された。物理的に線そのもののリアリティが追求されたのである。これは既存の「ドローイング」の概念を一変させるものであったと言える。さらに近年は、紙を支持体とする平面作品の線表現のみならず、版画、彫刻、インスタレーションに位置付けられるような作品までもが拡張された線表現として「コンテンポラリー・ドローイング」と呼ばれている。またドローイングは「即興的で瞬時に生み出される表現だ」という考えも過去のものであり、長い期間と労力をかけて制作される作品も数多く存在する。旧来的な意味での「ドローイング」とは異なるものであることを示す動きが進んでいるのだ。それゆえ「コンテンポラリー・ドローイング」を主題とする展覧会も世界各地で開催されている。本展もそのような流れの一環にあると考えられよう。

では現代において、ドローイングの概念が拡張され、多くの人から求められているのはなぜだろうか？多種多様なメディアが存在し、視覚情報が氾濫する今日にあって、ドローイングの表現は直截的に作品や作家の世界と向き合い対峙しなければならないものだ。そのことが翻って魅力であり、求められている要因ではないか。ドローイングは、どれほど丹念に線が描き込まれていたとしても、「draw=（線を）ひく、ひっぱる」という言葉を語源とするように、文字通り動的かつ原初的な要素を色濃く残す。完成された作品でありながら作品として構築するプロセスを鑑賞者に強く想像させる。そのプロセスとは、実際の制作過程のみならず思考が立ち上がる過程もすべてである。それは他の芸術形態よりもドローイングに際立つ部分であるとともに最大の魅力であろう。

作品とは、言うならば作家の思考、イメージが身体を通して視覚化、外部化されたモノである。しかし作品は、絵画であれ彫刻であれ、いかなる形態であっても、作家から生み出され世に出てからは、作家という個人から離れて、独自の道を歩んでいくものである。だがドローイングの場合は、常に作家の存在や気配をまとい、あたかも傍らに作家がいるかのような生々しさを帯びている。もちろんそれは鑑賞者の想像に過ぎないかもしれないが、想像せざるを得ない状況を作り出すのだ。ドローイングは、具象であれ抽象であれ、個人的、親密さ、繊細さ、儚さといった特徴を持つ。そして、ドローイングに描かれたモノは、虚構や他人事ではないという切実さと信憑性をともなって、私たちに「見る」という行為そのものにも目を向けさせるのである。